在日韓国・朝鮮人の配偶者選択に関する一試論

—家族の中の「長男」を中心に—

A Study on Spouse Selection of Korean Settlers in Japan:

A “*Chônán*” in the Family

橋本みゆき

HASHIMOTO Miyuki

In families of Korean Settlers in Japan, “*chônán*”, or eldest sons, inherit the status and power of the family patriarch, and impose on themselves their own expectations as well as their parents'. I will use interview based data on married young men and women in order to examine the various choices of spouse by Korean Settlers in Japan and the relation between gender issues and the position of “*chônán*” in the family.

1. はじめに

配偶者選択は、当事者にとってそれまでの／これからの家族形成の転換点をなす、重要な人生のイベントである。在日韓国・朝鮮人⁽¹⁾にとっても、結婚はまさに世代交代と直結する契機であり、ジェンダー関係およびエスニック関係が交錯する地点となる。エスニック・マイノリティのジェンダーについて論じる際、ともすると、支配的集団／エスニック・マイノリティそれぞれの男性／女性という2つの軸によるカテゴリー化から抜け出せなくなる。しかし、ジェンダーは実体的な性別の二分法の言い換えではないし、民族だけが彼／彼女の属性を規定するわけでもない。あるカテゴリーの人びとのジェンダーやエスニシティをパズルの1片のように扱うことはできない。本稿では、ジェンダーという視座から何らかの「現実」を可視化させることができるという展望のもと〔江原1995: 53〕、若い世代の在日韓国・朝鮮人の配偶者選択実践において、家族という場に注目し、当事者たちの背後にある一つの「現実」に迫ることにしたい。そして、家族を支配する「家父長制」の論理と在日韓国・朝鮮人の「生活の論理」〔桜井厚1996: 51〕の間の関係を考える⁽²⁾。ここで「生活の論理」とは、外部からの差別的なカテゴリー化にさらされた時これに対抗する、彼／彼女の語りに表現された認識枠組（＝「現実」）をいう。したがって、その「論理」に先立つ差別的な社会状況があるという前提がある。ただし本稿ではその前提をいったん括弧に入れておき、民族差別やエスニシティの問題に関しては最後に若干触れるだけにしておく。

民族間結婚は、西欧諸国においてはしばしば社会統合の指標とされるが〔宮島1999: 5〕、日常生活レベルにおいてカテゴリーの異なる人びとがせめぎあう社会的行為の場としても注目に値する。在日韓国・朝鮮人の結婚に関する議論は、近年、日本人との「国際結婚」の増加⁽³⁾という「問題」に焦点が当てられている⁽⁴⁾。日本籍者との婚姻の増加が特に女性に目立つのを受け、同胞結婚の減少の原因としてしばしば言及されるのが、在日韓国・朝鮮人家族の女性にかかる負担の大きさである（性別役割分業や暴力、非婚者差別など⁽⁵⁾）。一方で鄭映恵は、日本国籍者との「国際結婚」が増加した理由は単純ではなくさまざまな

ものが複雑に絡み合ったもの、とする。例えば、①同胞結婚を願ったとしても在日朝鮮人同士が通称使用などにより互いに不可視化していること、②在日朝鮮人男性にありがちな男尊女卑の暴力性を女性が嫌って日本籍男性を選ぶこと、③差別のため相対的に経済力が低い在日朝鮮人男性よりも経済的に安定した日本人男性を指向すること、である〔鄭2000: 30-31〕。人びとのせめぎあいがあるのは、同一民族に属する在日韓国・朝鮮人同士の結婚でも同様なのである。

ところで、既婚者に対する聞き取り調査を進めながら筆者が感じているのは、若い世代の在日韓国・朝鮮人男性が、必ずしも性差別的でもましてや暴力的でもないこと、また、家族への愛着が強いことである。もちろんそれはインタビュー場面という特殊な状況での印象にすぎないが、金鶴泳や李恢成の小説で描かれてきた「乱暴者」の父親像とは明らかに距離がある。実は在日韓国・朝鮮人の家族や結婚については、民族主義的あるいは女性解放の視点に立った問題提起はあっても、男性個人の社会的現実や男性間の差異を実証的に論じることはこれまでほとんどなかった。そこで本稿は、在日韓国・朝鮮人男性、特に「家父長制」の受益者として疑われることがなかった「長男」を中心に、配偶者選択場面において現れる「論理」を見ていく。これは、上述した在日韓国・朝鮮人の今日の結婚現象を解釈する一つの試みでもある。

2. 分析枠組

菰淵緑は、本人同士の意志が尊重される結婚を「自律婚」、当事者以外によって事が運ばれる結婚を「他律婚」と規定する〔菰淵1981: 36-37〕⁽⁶⁾。この区分を若干修正して婚姻1件あたりの構成に着目すると、当該婚姻には自律的要素／他律的要素が混在する、という見方ができる。自律的要素を「本人同士の純粋な恋愛感情」、他の全ての要因を他律的要素とすると、ある配偶者を選択した要因のほとんどが他律的要素であると言える。第三者が強制的に結婚させるのでなくとも、規範や象徴的な権力が発動して「自由な選択」に影響を与えたり、家族状況や性別などの社会的位置に応じて影響の受け方および方向づけが異なることもあるだろう。自律的／他律的という区分によって、恋愛結婚における他律的要素が浮き彫りになる。ここで問いたいのは、「どれほど他律的⁽⁷⁾であるか」ということよりも、「どのような他律性が規定的なのか」である。

他律的規定力を支える要素として考えられる「論理」の1つは、「家父長制」である。そのほか、差別回避や経済的戦略などの「論理」も考えられるが、ここでは取り上げない。日本の「恋愛結婚」比は今や87.3%に伸びているとする統計がある〔国立社会保障・人口問題研究所1999〕。しかし、近代社会になり恋愛結婚が主流になってからも、その結婚相手としての魅力の基準の中には男性優位な家父長制の特徴が持ちこまれているという指摘がある〔山田1994: 27〕。上野千鶴子によれば、「恋愛結婚」のイデオロギーさえも家父長制の罫から自由でない。ロマンチック・ラブを経て女は、「父の権力」から解放されるや「夫の権力」にすすんで従属するのだという〔上野1990: 58-59〕。では「父」そして「夫」は家父長制の罫にはまること言えるのだろうか。そうは思われない。

瀬地山角は家父長制を、「性と世代に基づいて、権力が不均等に、そして役割が固定的に配分されるような規範と関係の総体」と定義し〔瀬地山1996: 45〕、記述概念ではなく分析概念として定式化した。分析概念としての「家父長制」（分析概念として用いる時は

カギ括弧を付す、以下同様)は、フェミニズムの用語法とは異なってそれ自体では何ら実態を表すものでないが、「いかに家父長制的か」よりも「いかにして一定の(家父長制的な)論理によってそこでの秩序が構成されるか」に目を向けさせる。

性と並んで家父長制秩序の主要変数である世代および年齢に関して言えば、(男系)家族の継承を考えるなら男きょうだいの順位(長男/長男以外)が重要である。R.W.コンネルが「さまざまな男らしさの関係は、家父長制的な社会秩序を作動させるためになくはない要素」[Connel 1987=1993: 265]であると論じるように、男性間の秩序にも注意を払う必要がある。直系家族での男らしさとは家長らしさに通じるところがあり、それを第一に期待されるのは長男である。朝鮮社会で長男は子の中でも際立った位置づけにあり、両親や親族の注目を浴びて育てられるのである[伊藤亜人1986: 41]。そこで、次節以降の分析においては、長男/長男でない男子/女性と、3つに分けて考えてみる。規範としての家父長制は女性に従属を要請するが、実生活で「家父長制」の論理に従うのは女性だけでない。なお、次男以降の男性が夫婦家族の家長となる場合は、家系存続とは直接関係がないので若干事情が異なってくる。

当然ながら、在日韓国・朝鮮人家族を秩序づける「家父長制の型」なるものがあるとしたらそれはどのようなものか、という問いが生じるだろう。しかしそれは次の段階の議論とする。本稿の関心は、長男のジェンダーを「家父長制」と照らし合わせることで、在日韓国・朝鮮人の「生活の論理」を規定するどんな社会的現実が見えてくるかということにある。次は、対象者たちの語りから、在日韓国・朝鮮人の「家父長制」に関わる「論理」の現れ方を掘り起こしてゆく。

3. 配偶者選択の諸要因

(1) 聞き取り調査について

2001年10月から筆者が行っている聞き取り調査は、夫婦の少なくとも一方が在日韓国・朝鮮人である結婚歴10年以内の既婚者を対象としている。2002年2月時点で9人の協力を得ており、6つの結婚について聞き取りをしたことになる(離婚経験者および日本人配偶者を含む。夫妻双方に話を聞いたのは3組)⁽⁸⁾。質的には辛うじて本稿の目的に応えうるデータを確保できたと考えるが、量的におよびバランスの面ではまだ十分でないことを承知している。そのため以下の議論は、限られたデータの範囲内での試論ということにしておく。

聞き取り対象者の偏りについて、はじめに断っておかなくてはならない。例えば、朝鮮学校出身者は在日韓国・朝鮮人対象者7名中6名、長男が在日韓国・朝鮮人男性5名中4名、夫婦のどちらかが現在自営業主である家族が6件中4件、東京都内在住者は6夫婦中5組、などである。これらの偏りは、調査計画半ばであることおよび調査者の人脈形成がまだ途上であることを意味し、他意はないが、これらのデータをもって在日韓国・朝鮮人全体に一般化することは控えなくてはならない。

(2) 事例紹介

まずは、長男/長男以外の男性/女性の3区分に沿っていくつかの事例を取り上げ、それぞれの語りを紹介する(下線部は強調したい個所)。必要に応じて家族の文脈を補いつつ、結婚までの経緯、配偶者選択要因、結婚後の家族内分業を中心にカテゴリーごとの共

通性と多様性を拾い出す。聞き取り対象者およびその配偶者は結婚順に割り振った仮名で示す（語り手はアルファベット。男性A～F、女性a～f。たとえばA-aは配偶関係にある。聞き手は＊で表記）。

1) 長男

① 事例E（1999年に飲食店同胞経営者の長女と結婚。実家の飲食店を後継）

友人の妹である現在の妻とつきあい始めて1～2カ月過ぎた頃、2人の交際を知るやEの母親は、「もし結婚するなら今年か3年後にしない」と言い出した。占いで運気が悪くなると出た翌年以降3年間の結婚は許さない、というのである。Eとは既知である妻方の母親が「3年はちょっと待てない」と言ったことから、その年のうちに結婚することになった。Eの父は「お前が決めることだ、日本人以外だったら大丈夫」といった、細かいことは気にしない態度であった。

E：（彼女との結婚を決めた理由は）誰も反対する人がいないってこと。それはやっぱ、長男として。それで、うちの親とも仲良く付き合っていけるなってことで。結婚は、2人のあれじゃないから。家族のつながりだから。

＊：それをすごく意識してたんですね。彼女個人だけでなく、周りの。

E：そうそう、結婚するときはもちろん。2人だけで良かったら、結婚しないで同棲すればいいんだから、一生ね。そういう考えですから。（略）

（略）

E：だから、うちの親が反対する3年以内には結婚しないようにしたし。

Eは、民族的な部分では父親の影響が大きく、最も影響を受けているのはやはり長男だと感じている。Eの親族では祖先祭祀行事が1年に4～5回行われる。そのときお嫁さんたちは調理要員に駆り出される。「そういう儒教的なアホアホ精神がすごく強くて」とEは言うが、その任務の遂行能力はEが嫁になる女性に求めた条件の1つであった。現在は育児に専念する妻がいずれ就労したいと話していることに対しては、「勝手に、自由に」していい、「ただ、オモニ（母親）として、やるべきことはやってください、と」と考える。

② 事例D（同胞同業者の長女と1998年に結婚、2000年離婚。現在、家業の管理職）

Dは会社勤めをしていたが、家業のパチンコ店の出店計画を知らされた頃、見合い話が持ちあがった。いずれは親の仕事を継ぐという心づもりでいたので、「そろそろなんだな」と思い見合いに応じたところ、その相手を気に入ってしまい、翌年結婚した。しかし、業種と役職柄あまりに忙しく過ごすうち、病に倒れてしまう。妻は子供を欲しがっていたのだが、望みを数年間絶たれた状況になると、夫婦関係が悪化して修復できなくなった。当時は非常につらい思いをしたDにも、現在は再婚の意志がある。

Dはきょうだいで唯一の男性である。自分が家業を継ぐのだと小さい頃からおぼろげに意識しており、大学では自ら選んで経営学部に進んだ。親の敷いたレールに反発して両親とはよく喧嘩をしたが、配偶者選択では親が喜ぶような相手にすることを課題とした。

D：ということは、日本人は連れてきちゃまずいだろ、そういう制約って、自分の中ではあった。

(略) 日本人はまずダメ。あとね、あとダメっていうのは、別に、ないかな。

(略)

*：(パチンコ屋を理解できる人という条件に対し) 相手はパチンコ屋さんの方がいい？

D：まあそれ、極端な話。パチンコ屋さんじゃなくても、パチンコ屋だっというのを理解してほ
しい。時間的な問題もそうだし、土日は逆に忙しいとかさ。あとはまあ、何ていうのかな…
… うちの親と仲良くなってほしい、みたいのはあったね。(略) じゃあ俺はどう思ってる
かって言ったら、本人としては別にどうでもいいことである。

*：どうでもいいって？

D：別に日本人の女の子でもオッケーとかさ、心の中では。別に価値観が違うとかとは思ってない。
ただ大前提として、(親は) 絶対許してくれないな、みたいな。

こと日本人との結婚に関しては「絶対だめ！」と言い聞かせてきた親を、理不尽だと思う。それでも、そのように言うだけのいきさつや背景を考えると、一概に親を否定できない、親にとっては朝鮮人として生きていく大切なモチベーションに関わる問題なのではないか、と語った。自分としては日本人女性と結婚することに抵抗はないが、親の反対が目に見えているので、今でも、結婚相手は「やっぱり韓国人のほうが角がたたなくていい」と考える。ただし、以前の気負いはいくらか和らいでいる。

D：一番、今の心境と当時の心境とで違うのは、当時はそういう体裁とか建前とかそういうのが
すごく大前提にあって。長男とか。孫では男として初めての結婚だったから、親戚とかでも。
失敗しちゃいけないとか、いい子を選ばなきゃとか。(略) 人に示さなくちゃいけないとか。
今は、1回失敗してるから (笑い)、そういうのね、すごいなんか、別に何でもいいやもう、
って感じ。

離婚後に交際した韓国人女性との結婚を考えたことがある。飲み屋で働いているという彼女の経歴に関する親の反対が予想されたが、その時は「健康な子ども産めばそれでいいじゃないかよ、っていうふうに言おう」と思った。「うちの親も (子供が) 欲しくてしょうがないんだよ。それをまずきっちりやれば、俺の役目はもう果たしたでしょ、みたいなね」。こうして、自分の配偶者選びであっても、親の意向に沿った範囲内での結論を出す、という課題が持続される。

2) 長男でない男性

○事例 A (会社で同僚だった日本人長女と1994年に結婚。三男だが飲食店を後継)
同胞企業で働くうちに同僚の日本人女性に惹かれ始めた A は考えた。

A：(相手が) 日本人だったんで (ためらった)。ていうのはありましたけどね。確かに、なん
か、朝鮮の人と結婚しなくちゃいけない、みたいな使命感はあったんですけど。

(略)

(a に好意を感じるようになってから、その使命感が) 見えないふりしてたというか。でも、

いろいろ考えて。自分はどうやったら幸せになれるのか。幸せて言ったらおかしいけど、どうやったら納得できるのかなって思ったら、それは逆に民族とかそういう感じるよりも、男としての方がやっぱり強いかな、という気がしたんですけどね。

当時付き合っていた在日韓国・朝鮮人女性とは別れ、相当の覚悟を決めた上でaに思いを打ち明けた。在日韓国・朝鮮人への偏見や家業を継いだばかりのAに対する経済的不安などによる、aの父親の反対があったものの、結婚式では周囲の祝福を受けたようである。

中学2年の時にAの父が他界して以来、母親は焼肉店を切り盛りしながら3人の息子を育てた。「長男絶対主義」の母は、極端に言うと、「長男がしっかりしとけば、あとはなんでもいい、勝手に生きてけ（笑い）、と」いう姿勢であり、Aがaを連れてきた時も特に反対はしなかった。ちなみに次兄はAに先立ち日本人女性と結婚していた。

A：（日本人との結婚を決めた時の周囲の反応は）特に（ない）、ですね。僕は三男ですからね。長男だったら問題が全然、根本から違ったかもしれないですけども。（略）だから僕の、長男、兄貴は、朝鮮の人と結婚して。子ども三人いるんですけども、みんな姪っ子なんですけども、みんな朝鮮の学校行って。

Aは、在日韓国・朝鮮人の個人商店にありがちな“嫁はダンナを手伝うのが当たり前”とみなす「悪い習慣」には疑問があり、「生きたいように行けばいいじゃないか、男でも女でも」という思いがあった。そのため妻には家業を手伝うことを求めなかったが、結果的にはaも店の仕事に入った。

三男ながら家業を継いだAは、男も女も「生きたいように」すればいいという考えを貫く。Aの母親としては、後継者の妻であるaが店を手伝うことを期待したようだが、自称頑固なAにあまりガミガミとは言わなかった。aとつきあう前にAが悩んだのは、「民族として／男として」自分はどちらの幸せを選ぶのか、ということであった。結局「男として」好きな女性との結婚をとったのだが、「民族として」の自分を捨てたわけではない。お互いを尊重しつつ、民族的側面でも自分の感覚に正直であろうとしている。

3) 女性

① 事例c（東北地方の飲食店経営者の長女。同胞飲食店の長男と1997年に結婚）

cの夫Cは日本生まれ日本育ちであるが、朝鮮半島の本籍地にあたるのは済州島である。済州島出身者との結婚をよしとしない傾向のある慶尚道を本籍地とするcの家族は、店に焼肉屋修業に来たCを、cの結婚相手候補とは当初みなさなかった。しかしcは、Cの人柄のよさを知るうちに、「この人とやっていける」と感じるようになる。反対していた親やCの先輩でもあったcの兄も折れて、一人っ子のCのもとに嫁いだ。

cの地元には在日韓国・朝鮮人があまり多くは住んでいないのだが、cは朝鮮学校や就職先などで在日韓国・朝鮮人に囲まれて生活してきた。そんな環境になじんできたcにとっては、日本人と結婚するという感覚がわからない。また、ずっと一緒に学校で過ごしてきた地元の先輩などに対しても、きょうだい感覚に達してしまっていて恋愛感情がわかな

い、と言う。在日韓国・朝鮮人男性が男尊女卑的で「封建主義が強い」傾向には不満があり、妹と時々愚痴を言い合っている。「(こんなイヤな思いするくらいなら、優しいという噂の) 日本人と結婚した方が、まだマシだよね!」。けれどもそれはcの本意ではない。

c: ただ、封建主義強いからその人(在日韓国・朝鮮人)と結婚しない、そういうのはなかった。
(略)

c: それは、ついてくるもの。(結局は封建主義的な在日韓国・朝鮮人男性と結婚するというのは、) 矛盾してるのもいっぱいあるし、変だなんて思うものもあるし、なんだそれっていうのもいっぱいあるんですけど(笑い)、結論からいえばそういう関係だから、絶対日本人と結婚するというのはあり得ない。絶対絶対。

在日韓国・朝鮮人には封建主義的な男性が多いが、日本人男性は選択肢以前の問題なのである。恋愛対象となる同胞男性とも出会う機会が限られた「狭い社会」では「付き合うイコール結婚」になりがちだと話した。夫が一人息子であることについては、男のきょうだいがいなくて「よかったじゃん」と友人に言われたそうである。「嫁同士の争いってどうか、嫁同士の競い合いがあるみたい。それがなくて、いいよーって」。

② 事例 f (九州の飲食店経営者の二女。2001年、同居の日本人長男と挙式)

fの親や祖母は、結婚相手は「別になにに人でもいい」と、「全然こだわってない」様子だった。民族学校への就学経験がなく親からも日本名で呼ばれてきたfだが、上京後、在日韓国・朝鮮人の青年活動に参加するようになる。その関わりで知り合った現在の夫である日本人のFと交際後、共同生活を始めた。実家の親に「一緒に住むくらいなら結婚なさい」と言われたことをきっかけにして式を挙げたが、婚姻届はまだ書いていない。

fが以前交際した男性は全て日本人であり、民族的出自については「隠し通して」きた。Fは在日韓国・朝鮮人の戦後補償や民族教育に関わる社会運動に携わってきており、在日韓国・朝鮮人問題に詳しい。だからFに対してfには国籍・民族絡みの不安はなかった。

f: もともと彼は在日の戦後史の運動してるから、在日のことは私より知ってるわけですよ。だからそれは安心できたし、なんかあったら守ってやるぞという感じですから、それは全然ないですよ。

ところが、実際に結婚の話が進むうちに、Fの母親が、fの実家を訪れたのを機に日本名で呼ぶようになった。f方の親が日本名で呼ぶのに自分たちは「なんで民族名で呼ばなくちゃならないのっていう考えがあるみたいで。今だに日本名で呼ぶ」という。その後、この話題には触れることがなくうやむやになってる。夫のFによると、結婚式では新婦の親族が日本名だった中で新婦のfだけが民族名で参席したそうである。

三人姉妹の真ん中であるfの実家では小さな焼肉店を営んでいるが、将来についてはあまり話し合いがない。日本人である夫のFが焼肉屋をやろうかと言い出しており、実現可能性はさておくとしても地元に戻る話にfは悪い気がしない。もっとも、きつい焼肉屋の仕事を自分が「やろうとは思ったことない」ので、店は彼に任せて自分は「もっとほか

の仕事」、と笑う。

4. 分析・考察

(1) 「長男」のジェンダー

ジェンダー関係を、①分業、②権力、③カセクシス（感情を発現させる対象の選択）⁽⁹⁾という3構造で捉えるコンネルの説明に対し [Connel 1987=1993: 159-60]、江原由美子は、このうち②権力構造は他と異なる抽象性水準にあるとし、他の2つの中の一形態としてこれを位置付ける [江原2000: 124-5]。ここでは江原の整理に従い、①③にあてはめて考える。

対象者たちの語りには、それぞれ分業とカセクシスに関する具体的な経験や意識が埋めこまれている。始めに分業構造から見ていく。性別分業とは、男性／女性にそれぞれ、生産／再生産労働、有償／無償労働、中心的／補助的労働が割り振られる現象を指すが、ここでは家族生活の場においてそれぞれが担うあるいは求められる役割に注目し、夫／妻という二者間だけでない家族内分業を考えてみたい。ここで家族とは、主に夫婦家族および夫方の親である。

子供は夫婦だけの関心事ではなく、夫方の親族との関係につながっている。嫁入りした女性の場合、夫方の家族に関わって担う母親役割がある。例えば長男と結婚したbには、「男の子を産まなくちゃ」という意識があった。夫の姓を残さなくてはならないし法事を継承することになるからである。たまたま男の子を出産して「ほんとによかったんですけど」、と言う。また、前妻との間に子供が授からなかった長男のDは、次の結婚では「健康な子どもを（妻が）産む」ことが悲願であり、それができれば「俺の役目はもう果たした」ことになる、と考えるようになった。親との同居も、1つの争点となる。自分の親と良好な関係を保てる女性を妻に望む長男の語りが複数見られたが、夫方の親との関係をめぐって結婚後に夫婦がもめることがある。Eの妻は「同居は無理」と断言する。「気を使いすぎてしんどい」から、だそうである。妻は今だに実家の一員だという感じが強いから「苦労してる」のだ、とEは言うけれども、親と妻の板ばさみになるE自身も頭が痛い。自営業家族では、既婚の跡取り息子が中心的存在になっていく。Cは、今の店を築いてきた母親に感謝していると話す。店のおかげで自分は育ててこれたし、「学歴はない⁽¹⁰⁾のに（略）案外いい生活してる」。ならば自分は店舗を大きくしよう、という考えになる。同じ自営業者層出身でも女きょうだいの場合、なんとかして店を続けるという話は聞かれなかった。

家族内分業の遂行は、本人および夫婦だけではなく、配偶者および夫方の親と密接に関係する。世代間別居により妻は夫の親からの干渉を最小限に抑えることができる一方で、長男である夫にはその間を取り持つ仲介者としての任が残される。家業後継では息子とりわけ長男が期待される。こうして長男は、望むと望まないに関わらず「家父長制」秩序の維持のための分業を自らに課す。これを、「家父長制」論理への分業的従属としておく。

次に、カセクシス構造から長男の選択を検討する。江原はカセクシス構造を、他者に対する情緒的愛着そのものとしてでなくこれが実現される場合に社会が課す一定の規則として、他者へのふるまいや情緒的愛着を表現する規則として、情緒的愛着を示さない社会的実践も含めて、と再定義する [江原2000: 140-41]。情緒現象をこのようにメタレベルで

捉えることにより、男女間の性愛的二者関係にとどまらないジェンダー関係の構造が、配偶者選択場面においても浮かび上がると期待される。

c・Aは究極的には個人の幸せを追求するという視点から、当初の対象範囲を修正して周囲の反対を克服し、配偶者選択の自律性を強めた。初めこそ本籍地問題でCとの結婚に難色を示したcの母親も、今ではcに「お前は世界一幸せな嫁だ」と言うそうである。なおEの妻（e）の父親に至っては、以前は日本人との結婚には反対の立場であったのが、娘が親元から遠くへ離れてみると損をしたように感じるらしく、今や独身の娘たちには「なに人でもいいから近くで結婚しろ」とまで言うようになったという。長男以外の男性や女性に見られるそうした軌道修正に対し、Dは長男の立場を意識し続ける。

情緒的な対象選択および選択パターンは、特定の強い制約がなければ、状況に応じて変化しうる。しかし、選択の他律的傾向が強い長男の場合、たとえ本人の状況が変わったとしても、その家族内地位ゆえの制約は変化しにくいだけに、対象選択やそのパターンを変更する可能性が小さい。それは、親の言いなりになるというよりはむしろ、「家父長制」の論理が課す情緒パターンへの従属である。

(2) 在日韓国・朝鮮人家族における「家父長制」の論理

家父長制は、男性による女性支配の制度であるとしてフェミニストの主張の根拠となってきた。在日韓国・朝鮮人社会にあっても、男尊女卑思想を内在させた儒教規範の影響と相俟った問題としてかねてから批判されてきた。父系血縁原理を取り年長者を重んじる朝鮮の家族制度のもとでは、長男の権力は強大である。一方、上で見てきたように、配偶者選択とその後の家族形成過程におけるジェンダーに着目するとき、「家父長制」の論理に従う語りが、特に長男において確認できる。親の期待を背負い、家族の中の自らの位置を認識し役割を内面化し、従来の家父長制的秩序を維持させるべく、長男は奉仕する。妻をもそれに巻き込もうと働きかけるが、妻たちは必ずしも同意しない。また、長男でない男性の「家父長制」に批判的な語りも見られた。大阪の在日韓国・朝鮮人4家族に対する谷富夫らの生活史調査においては、国際結婚について女性が多様な結婚観を語ったのに対し、男性の語りには、長男の家の継承に集約される傾向があったという〔大東2000: 495〕。これは、語りの性差を示すにとどまらず、「論理」のジェンダー化であるととれる。このように見てくると、「家父長制」は、長男／長男以外の男子／女性を、異なる仕方で支配すると考えられる。

韓国・朝鮮籍男性（特に45～65歳）の自殺件数が相対的に多いという李節子の指摘を受けて、鄭瑛恵は2つの要因を仮説的に挙げている。1つは、家父長としての家族を経済的に扶養する責任が男性に集中しすぎていること。もう1つは、性別役割分業が男性を一元的価値の生活に追い込み、人生の選択肢や柔軟性を失わせること、である〔鄭2000: 36-37〕。これらは男性と「家父長制」の論理との消極的連関の結果として推測できる。もっとも、男性自身には、抑圧されているという感覚はないかもしれない。伊藤公雄は、＜男らしさ＞を構成する3つの欲求、すなわち女にたいする優越志向・権力志向・所有志向が、男たちを強く拘束していると指摘する〔伊藤公雄1993: 166-68〕。これらの欲求を追求する自由の見せかけのもと、男性とりわけ長男は、＜家父長らしさ＞に拘束されているのではないか。

直系家族の中で長男は、配偶者選択の際、「家父長制」の論理を体現する役割を引き受ける。そこには、自らの家長としての利益あるいは家族や民族の内部秩序の維持のためだけでなく、家族や民族への情緒的愛着ゆえという側面があると思われる。在日韓国・朝鮮人の一世は家族主義を文化的土壌として元来持っていたし、戦後の日本で生き延びていく上で、家族の結束と民族の団結は必要不可欠だった〔鄭2000: 33〕。家族と社会との関係を考えると、在日韓国・朝鮮人家族の「家父長制」の論理は、日本におけるエスニック関係の問題が深く関係しており、日本社会との相互関係の中で構成されてきた「生活の論理」の1つと見ることができる。理不尽な親でもなまじ否定できないと言うDの語りにそれが表れている。在日韓国・朝鮮人家族の「生活の論理」を多角的に解明するためには、エスニシティの視点からも接近する必要があるが、それはいずれ稿を改めて別の機会に論じたい。

5. おわりに

「自分のことを話しても、日本人と有意に違うのか疑問である。個人差の問題であって、在日韓国・朝鮮人だからといって言えることがあるかどうか」という指摘が、インタビューの冒頭で語り手からぶつけられたことがあった。確かに、日本人同士の結婚事例との比較なしに違いを特定することはできない。しかしながら、聞き取りの中には、在日韓国・朝鮮人の社会的諸条件に関わると思われる点がいくつもあった。その1つが、家族で長男が占める比重の大きさであり、彼らの世代間継承への意思である（親の築いた店、姓、祭祀など）。逆に言えば、その家族の「論理」と民族の「論理」のために、長男は重視されるのかもしれない。また、語り手あるいは家族によっては、在日韓国・朝鮮人というカテゴリーに回収しやすい「生活の論理」になじまない事例があった。そうした「論理」の多様化も、一つの現実なのだろう。

本稿のはじめに、在日韓国・朝鮮人の同胞結婚件数が減少している理由として、鄭の挙げた例を3つほど紹介したが、筆者の考える理由を4つ目として付け加えて締めくくりたい。それは、同胞結婚を望み同胞との出会いがあったとしても、④「家族を含む双方の当事者たちの条件が合致しないために結婚を先送りする人が多いこと」、である。日本社会においてと同様、在日韓国・朝鮮人たちにおいても、若い世代の「晩婚化」や「未婚症候群」傾向とともに、結婚相手に対する要望が高くまた多様化しているという指摘がある〔朝鮮新報社2000: 18-19〕。総連傘下の同胞結婚相談中央センターによれば、男性やその親が「嫁をもらう（のだからどんな女性であってもこちらに合わせてもらう）」といった感覚であるのに対し、女性の親は「娘が苦労しなくて済むような相手」を選ぼうとするそうである〔2001.5.30聞き取り〕。双方の思惑には微妙なずれがあるようである。そうしたジェンダー的期待の不一致が、特に長男の配偶者選択において厳しい制約条件となるのではないだろうか⁽¹¹⁾。また、希望にかなった相手と出会うまで妥協せずに結婚を留保する高学歴女性などが増えているという〔例えば、在日同胞の生活を考える会（仮称）1999: 58; 69; 73〕。そのような結婚予備軍がいずれ行う選択（相手／時期／非婚）もまた、他律的要因に少なからず規定されるのだろう。そのとき他律性を構成する「生活の論理」が、民族差別および性支配と無関係であることを願うばかりである。

付記：

プライベートに深く踏みこんだ質問にも答えてくださった聞き取り調査協力者のみなさんに、心より感謝の意を表します。

註

- (1) 本稿で在日韓国・朝鮮人とは、日本による植民地支配を契機に来日した朝鮮半島出身者とその子孫である「韓国・朝鮮」籍保持者をいい、在日韓国・朝鮮人家族とは、成員に在日韓国・朝鮮人を含む家族を指す。『在留外国人統計 平成13年版』によると、2000年末現在の韓国・朝鮮籍永住者は539,384人（うち特別永住者507,429人）である。
- (2) 桜井厚は、語り手のライフストーリーにおける、支配的な文化から相対的に自律した「生活の論理」への注意を喚起する。桜井が対象とするのは被差別部落の生活世界であるが、支配的な文化からの相対的自律性という視点は、ほかのマイノリティを対象とする分析にも有効だろう。
- (3) 『人口動態統計』各年版により婚姻届出件数の推移をみると、日本における「韓国・朝鮮籍者」同士の婚姻は、1970年代後半以降減少傾向にある。1979年以降は「日本国籍者」との婚姻件数がこれを上回っており、2000年は韓国・朝鮮籍者同士という組合せが合計件数の11.7%にすぎない。なお厚生労働省（前厚生省）統計では、韓国・朝鮮籍者の来日時期や日本籍者と帰化者の区別ができないなどの限界があるため、この数字をそのまま在日韓国・朝鮮人（と日本人）の結婚と言うことはできない。
- (4) 例えば「在日同胞シンポジウム '98」や朝鮮総連傘下の人権組織による座談会などの場で、若い世代の「国際結婚」・同胞結婚それぞれについて賛否両論が展開されている〔在日同胞の生活を考える会（仮称）1999; 在日本朝鮮人人権協会2000〕。
- (5) 在日韓国・朝鮮人家族の中で女性が受ける物理的・精神的抑圧については、朴和美が「封建的家父長制家族」として痛烈に批判している。性差別をめぐる問題は、在日韓国・朝鮮人の「女」と「男」の権力関係だけでなく、「女」と「女」、そして「男」と「男」の関係に影を落としている〔朴2000: 20-23〕。
- (6) 菰淵は、一般的に言われる恋愛結婚／見合い結婚という、実質に合わない用語に代えて、自律婚／他律婚という区分を提案した。自律婚の例には上方のよばいや庶民の寝宿を、他律婚の例としては、両家の政治的・経済的協力による家の存続に意義をみいだす武家社会の結婚を挙げている（菰淵1981: 36-37）。
- (7) かつて朝鮮では、結婚はほとんど親が決めるものであり当事者は関与しないのが当然とされていた。これはほぼ完全に他律的な結婚といえる。日本による皇民化政策期には朝鮮および日本で「内鮮結婚」が奨励されたが、現実には自分の子どもが朝鮮人との結婚を希望するとなると日本人の親が反対する傾

表1 聞き取り調査対象者およびその配偶者の基本的属性

夫							妻						
仮名	国籍	生年	きょうだい順	職業	朝学経験	定位家族家業	仮名	国籍	生年	きょうだい順	職業	朝学経験	定位家族家業
A	韓国	1968	三男 3/3	飲食店主	小中高	飲食店	a	日本	1968	長女 1/2	家業従事	—	小売業
B	朝鮮	1967	長男 2/3	会社員	小中高大	—	b	朝鮮	1970	長女 1/3	会社員	小中高大	飲食店
C	韓国	1970	長男 1/1	飲食店主	小中高大	飲食店	c	韓国	1971	長女 2/3	主婦（育児）	小中高短	飲食店
D	朝鮮	1970	長男 2/3	家業の管理職	小中高	サービス業	d	朝鮮	1970	長女 2/2	主婦（当時）	小中高	サービス業
E	韓国	1971	長男 1/3	飲食店主	小	飲食店	e	韓国	1973	長女 2/5	主婦（育児）	無	飲食店
F	日本	1968	長男 1/2	会社員	—	—	f	韓国	1975	二女 2/3	派遣社員	無	飲食店

向が強かったという [竹下2000: 55-64]。こうした結婚には、政策による促進と家族による抑制という2つの対立する他律的作用があったと言える。

(8) 聞き取り調査の対象者とその配偶者の属性は下表のとおりである。

- * 仮名欄で網掛けした者の記載事項はその配偶者への聞き取りによった。
- * 韓国籍者12名中5名は朝鮮籍からの変更による。日本国籍者の中には帰化者はいない。
- * 「きょうだい順」は、(上段)続柄。(下段)出生順 / 現在のきょうだい数。
- * 「朝学経験」とは朝鮮学校就学経験のこと。学校教育法では朝鮮学校は「各種学校」扱いであるが、現在の教育課程は日本の学校に準じて設定されている。同じ段階に相当する学校種別で記載した。これが各対象者の最終学歴とは限らない。日本人には「—」を付した。
- * 「定位家族家業」は親が自営業経営者のみ記載。家業がない場合は「—」を付した。
- * D—d は見合い結婚後、離婚。そのほかは恋愛結婚の形態をとっている。

(9) S.フロイトは、性的本能動因のエネルギーをリビドー、それが向けられ充たされる対象をカテクシス (Cathexis) と呼んだ [金城1981: 621]。カセクシスの内容としては、性愛のほかに象徴的目的や安心の追求 [Connel 1987=1993: 181]、そして親子関係の情緒的執着もある [江原2000: 139]。そのように考えると、配偶者選択時に情緒を傾ける対象は、配偶者候補の異性だけでない。実際の聞き取りでも、男女二者の関係にとどまらない、家族を介在させた語りが多かった。

(10) Cは朝鮮大学校を卒業し、朝鮮学校での教員の経験もある。「学歴がない」とは、朝鮮学校での教育年数が長くても日本社会ではそれを学歴とみなさないことがあるのを揶揄した言葉だと思われる。

(11) 例えば『人口動態統計』を見ると、2000年の「韓国・朝鮮籍」者の婚姻件数(相手が日本籍者の場合と「韓国・朝鮮」籍者の合算)は、女性7,365件に対し男性3,660件と、男性の婚姻が女性の約半数である。ただし先述したように、「韓国・朝鮮」籍者にはニューカマー韓国人も含まれるため、解釈の余地はある。

参考文献

鄭映恵、2000、『『心の健康 (メンタル・ヘルス)』こそが重要課題になる次代以降』エーアイビー編『「在日」から「在地球」へ——在日コリアンビジネスマンたちへのメッセージ』UGビジネスクラブ、28-40。

朝鮮新報社、2000、『特集 2000年～いまここにある問題——現状と問題点、解決の糸口は／高齢化・結婚・教育・仕事・同化』『イオ』、43:14-24。

Connel, Robert.W., 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, UK, Polity Press. (=1993. 森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞訳、『ジェンダーと権力——セクシュアリティの社会学』三交社。)

江原由美子、1995、『ジェンダーの社会理論』井上俊ほか編集委員『岩波講座現代社会学11ジェンダーの社会学』岩波書店、29-60。

———、2001、『ジェンダー秩序』勁草書房。

伊藤重人、1986、『家族』伊藤重人ほか監修『朝鮮を知る事典』平凡社。

伊藤公雄、1993、『＜男らしさ＞のゆくえ——男性文化の文化社会学』新曜社。

金城辰雄、1981、『動機づけ』『新版 心理学事典』平凡社。

国立社会保障・人口問題研究所、1999、『平成9年 第11回出生動向基本調査 第Ⅱ報告書——独身青年層の結婚観と子ども観』。

菰淵緑、1981、『配偶者の選択と結婚』上子武次・増田光吉編『日本人の家族関係』有斐閣、23-51。

宮島喬、1999、『フランス移民統合における「エスニシティ」——90年代の統合の課題との関連で』『応用社会学研究』立教大学社会学部、41: 1-11。

大束貢生、2000、『在日韓国・朝鮮人の結婚観——民族関係とジェンダー関係を中心に』谷富夫編『民族関係における結合と分離の社会的メカニズム』1997-1998年度科学研究費補助金研究成果報告書、大阪市立大学、445-96。